



巻頭言

日本光学会の課題

日本光学会幹事長 一岡芳樹*

本年4月1日で日本光学会の前身である光学懇話会が設立されて満40年を迎える。年齢でいえば不惑、将来へ向かってさらに発展を願う節目である。10年前の本誌1982年2月号の創立30周年記念特集号では、諸先輩が設立の動機、発展の歴史などを詳しく語っておられる。ここでは、これら諸先輩によって築かれた礎を基に日本光学会がこれから発展するための課題について述べる。

この30年間の日本の経済的発展、および、それを支える技術の進歩は目を見張るものがあった。1960年代にはレーザーの実用化、1970年代からの半導体産業の驚異的発展とそれに伴う情報化社会の進展、さらに、光通信や光メモリシステムなどの実用化を目指した光エレクトロニクスを中心とする新しい技術分野などの発展である。この間、光学産業は世界のカメラ市場の大半を占める程に成長すると共に、半導体製造用ステッパー装置に代表される高性能光学器械の開発など高く評価される技術が多々あった。しかし、学会自体は、時代と環境の激変に対し必ずしも満足すべき対応ができなかったように思われる。

現代の科学技術は複合化技術を主体にして進展しており、21世紀に向けて驚くべきスピードで技術革新が進んでいる。これに対処するためには、狭義の光学という殻だけに閉じ込められず、自分達のアイデンティティを保ちつつ、新しい技術分野に柔軟に融合対処していくことが必要である。

そのため、日本光学会がこれから発展しつづけるためには、次のような課題に早急に取り組みねばならない。

1. 新しい光学のコンセプトの提示、光ならではの新しい技術開発と応用分野の開拓、新しい目標の設定と実行
2. 外国誌に流れてしまっている日本の優秀な論文を掲載できる光をキーワードにした国際誌の早期発刊と、光学大国日本のアピール
3. 日本光学会独自の学会を開催し、産官学界の人々による活発な議論
4. 組織としての国際貢献
5. 光学に愛着を持ち夢を託す優秀な人材の育成と世代交代
6. 分野融合による組織の強化と学会の自立・独立

幸い、光学や光科学・技術の複合化技術における重要性も日々高まっており時代は順風である。この機会を逃すことなく仲間を増やし、かつ、主導権をもって前進するのが光学の発展の道である。光学は光工学すべてにわたる総合基礎科学・技術であるという認識のもとに前進していきたい。